

俛を忍ばしむる此の老勇士、白髪を墨に染めて、肥馬に鞭打ち勇み進める老勇士、洋の東西を問はず、しばし聞く所あり少壯の人は是を見てあどて奮起せざる。

三、翁の昔話

其の身は幾千の艱難辛苦を経て、浮世の風波を凌ぎ來り、身は已に安樂に、其の膝の周囲には幾多の愛孫たはむれ遊ぶ、翁の心中果して如何ぞや、翁は徐ろに少時の艱難辛苦、其の時の有様を子孫に説いて意氣揚々たるにあらずや、又夫れ月暗く雨そぼふる夜に翁の自ら少かきりし時、馬を跳らして戦塵に臨み太刀一打、多くの敵を打ち取りしその時の光景を子孫に談するに及びて、壯絶、快絶、不思議氣激昂、見よ翁は涙潸々として下り、其の時の光景を追思し、子孫等亦不知の間に感化せられて、勇氣満面に溢ふるゝにあらずや。

憐むべき翁

第五年級乙組 川瀬政七

夏のさきつがた、余學校より歸り、獨り破机によりかきり、呆然たる折柄、我家の前を皴枯聲はりあげ、何やらん觸れ行くを、心かく見れば、頭に霜を頂き頬骨あらはれたる、六十路あまりの翁の紙屑かきをありはひとするものにぞありける、身にはつゞれの衣を纏ひ、積りし塵を拂はんともせず、凹みし眼の中には、貧苦にやつれし俛を留め、一目して其いたはしき有様を知る、これこそ我町の片はづれ、檐傾きたるあばらやに住める翁あり、きけば家には一人の媪あれど、よる歳浪には堪へ難く、腰はくの字の如くかきみ、立居さへもまゝあらず、物言ふことすら不自由ありとかや、子は今を去ること五年あまり、ふと仇し女に迷はされ、

親愛すべき妻子をもふり捨て、つれなくも遠き國へゆきわたり、今に音づれあしとかや、妻は思ひ募りていたすきの床に打ち臥し、遂に僅か一歳の緑り子を留めて身まかりぬ、嗚呼其當時、翁の悲しさいかばかりぞや、涙の袖の乾くひまあかりしあらん、母に離れし緑子は、乳はしやと泣き叫び、慰めんようもあし、數月前迄は貧しき中にも猶安かに暮し、身の、俄にたよる方なき身となり、一日の口を糊するよすがもあなく、やむあなくかゝる業をいそしめるあり、げに頼み難きは人生の行路ある哉、家の壁は處々破れて、風うち通し、其あたりは夏草生ひ繁りて、晝尙暗きばかりあり、實に彼等は家の裏邊の竹籬に、鶯の音をきき、春の來るを知り、草間にすだく虫の音しげきに、秋の來りしを覺ゆるが如き、實に哀れある境遇あり、世には齡六十路を越ゆれば、多くは家を子に譲り、或は念佛三昧に日を暮し、或はみやびの道に身をやつし、或は金殿玉樓に醉生夢死するもの多し、然るに此翁七旬の老の身を以て、朝は星を戴いて家を出で、夕には月を踏んで歸り、僅かの金を得て、細き烟を立て居るあり、風吹きすすむ嵐の日、雨ふりつゞくいぶせき日、此翁の皴枯聲をきかざるはあし、彼常に人に語つて曰く、老の身を以てかゝる業をなすは、いと苦しけれど、家に歸りて、愛らしき孫の顔に接せば、一日の勞苦をも忘るゝを得、されば惜しからぬ命をながらへ居るあり、實に可愛き孫の顔は翁の唯一の慰藉あり、老翁の家に歸る時、擔へる籠の中には、往々人形洋劍等の玩具の入れあるを見る、實に翁は血を絞りて得し金すら惜まずして、かく土産を購ひ、孫の悦ぶ顔を見んとかや、よしや身は貧苦に迫るとも、焼野の雉、夜の鶴、凡そ生とし活けるもの、親にして子を思はざるものあきを、況んや子に別れて其遺身とも云ふべき、唯一人の孫を持てる翁の身に於いてをや、されど彼日の暮るゝ迄はげみて得る所なく、空しく歸る日もあらん、炊くべき米盡きて、心細く覺ゆる朝もあらん、たく柴絶えて寂しく過す夜もあらん、嗚呼此時翁の心の中いかに、余は翁の皴枯聲をきく毎に、哀を催さるはあし。

幼童

第五年級 中 川 醇

昨夕より降り出でし雨の、今朝は漸く晴れて、淡黒色をせる雨雲は、春淺ければ未だ谷間に殘んの雪白き北の山を指しつゝ、七十里の波ゆたかある琵琶の湖を越えて走せ行くあり。

雨を含みて、緑を増しつる佐和山の南、低く田に連れる林より、旭日の光、赫々と輝きて、家をめぐれる小さき庭の植込の木の間を通じ、余の書齋の古くうす黒き障子を照らし、笈もる雫の影を寫しぬ。

今年五つゝあるいと愛らしき竹ちやん、今を盛りと咲き亂れし彼岸櫻の丈低き所より出でし一枝を折り取りて、うれしげにふりかざしつゝ、斑犬を追ひ行けり。犬は逃ぐる、竹ちやんは走る、輿に乗りて走り回りしに、足のはこびの付かざりけん、飛石の上にもうつぶせにまろび、大聲上げて泣きさけびぬ。手に持ちし花は一片又一片、泣ける竹ちやんの頭の上に散りかゝれり。

余は直に庭下駄、爪先に引つ掛けつゝ走せ行きて、小さき体軀を抱き起し、余の書齋につれ入りて、ボンチ書かごかき與へしに、いつしか泣き止みて、元の如く元氣よく、櫻の枝もて机をたゞき、幼稚園にて習ひし唱歌を歌へり、其花片讀みさしの書の上に、或は硯の海に散り亂れたり。

竹ちやんは。遂に枝を捨てゝ又庭に出で行きぬ。さてもあどけあき子よと、其後影を見れば、庭下駄の大きさを穿ちて奇しき歩みをうつせるありき。

琵琶湖畔の夕

琵琶湖畔の夕

第五年級 金 谷 杏 甫

昔さす日は今し西の山の端にかくれんとして、前に横たる雲間より、數條の金箭を湖上に射かけ、萬頃一碧の湖水は一時に燃え上り、波に浮ぶ沖つ島山の各半面は紫金にそめあされ、磯馴松のかげより上る煙も、半は茜に色ざられつ、我は湖畔の景を賞せんぞ、路傍の石に腰打ちかけぬ。

思ひは此勇壯偉大なる琵琶湖の靈氣にうたれ、無言の儘眺むることしばし。殘照次第にうそらぎ、伊吹山頭夕ばえの色さめて、黄金をうけし波の光りは底ひにかくるひ、静けき湖の面を破りつゝ、磯に眞珠の玉を散らし、かこがすさみの舟唄は、或は高く、或は低く、絶えあむとしては續き、續きては絶え、微かある餘音を長く曳きて、暮れあんとする空を歸る船夥多、あゝ彼等は磯の我家を眺めつゝ、宿ある可愛の子、そを守れる戀しの妻、嗚我が歸りを待てるらむ、今日は常あき漁もありしを語らば、妻も兒もいと嬉しと思ふらんかしあど、燈下の和樂を急かきつゝ、額に波の寄するまで頭に霜を載するまで、長き年月はかりかく、漕きつ戻りつ鹽馴衣、乾かす暇もあら波の、頭に載すや潮の花、夢ありけらしと今し語るらむ。

折りしも撞き出す鐘の音は、水面を傳ひつゝ遠く響き渡りぬ。家ある人は此音を聞く程に、すはや漁の舟は歸るらん、早く出てゝ助けばやと、磯にむれたつ妻子供、我舟何所ぞ待ち顔あり。

かくて我れは徐ろに歩を進めぬ、見渡す長汀弓の如く、白砂皓々、さながら雪路をたどるか如く、心地いとしき岩根本根踏み分けつゝ、辛くも峰に到り、苔むす岩に腰打ちかけぬ、さすがにこえし甲斐ありて、其眺めいとよろし。

金龜山は月の光を浴びて、木の間に見ゆる城壁は、いと興をぞましにける、汀に寄する白波は、幾萬の銀蛇砂の上に争ふが如く、麓に見ゆる燈火は細くして螢に似たり。遙かの沖を見渡せば、比叡も比良も渺々と月に螢ける奥の島、岩にせかれて玉をま白波、心も清水に洗はれて、さかから塵の世を逃れ、道士の所謂蓬萊瀛洲の山も、かくやあらんと忍ばれていとゆかし。

あゝ湖、汝は如何なる神秘を修むるものぞ、激波怒濤一度岸を咬むや、船を覆し、家屋を奪ひ、幾多の生靈を空しく魚の腹に葬り、丘陵も突き崩さずは止まざる汝の荒びを見し者、誰か怖れを生せざらん、然れども漣かすかに葦葉をゆり動かして、さながら眠るが如き湖の面の、平和を眺めしもの、一人として快哉を呼ばざらんや。吁若浮世の戦にもろくも敗をとり、業からずして心くじけ、失望落膽、頭を抱て絶望の淵に入らんとする時、先來りて之を訪問せよ彼は勇壯ある波浪の音楽と、宏大ある一碧萬頃の美景を以て、汝を迎へ汝の心神を鼓舞洗滌し、再び汝等をして秋水を佩かしめ、鐵馬金鞍に跨り、人生の戰場に走せ向はしむるの勇氣を與へん。

噫濁水うづまく汚醜の淵に沈み、世をはかむ塵の人よ、來りて此湖を友とせよ、吁事からずして失望の淵に沈下せられ、白頭を抱きて泣く人よ、來れ、來りて此所に慰藉を求めよ、彼が神秘はつかれし汝の心神を癒すに功あり、嗚呼我若しうき世の戦にもろくも破れ、痛悶憂感の岸に投せらるゝ日あらば、願くば世事の紛々をあげうちて、此山紫水明の域に放歌高吟し、自然を友とし、再び挫けし志氣を復治せしめん哉。我は種々ある思ひにふけりつゝ、恍惚として茫々たる琵琶湖上を見渡しつ。頭上の樹木は傘の如くに生ひ廣がりて空翠衣を濕し、足下の青壁刀にけづりて碧潭藍にそめり。折しも梢を過ぎてそよ吹く風は、磯うつ波と相和し、其音楽の巧ある言はんかたかし、實に蓬萊宮裡天人の奏する音楽

もかくやと忍ばれ、いと神々しき心地して、身は憂き世の塵を逃れ、蜃氣樓裡にさまようかと思はれぬ。あゝかくの如き美景は何時迄眺むともあくべきはてしかければ、想は後に留りて、後髪ひかる、心地すれど止むらく岩を立ち去りて、再びもこの路をたどりつ、家にと急ぎぬ。磯馴松の木蔭に結ぶ破れ家より、折り出づる笑聲は、今日のよき漁を喜ぶるべし。おはれ慰藉あり快樂ある眺めは、湖畔の景あるかを、吾は紅塵萬丈の都よりも、寧ろ此所を好むあり、見よ静かに眠る湖の上を、聞け平和を傳ふるかの音を、見るもの聞くもの一として吾人の心神を樂しましめざるあし、あゝあつかしき山、あゝゆかしき水、永く末々に到るまで我友とかれよかし。

月

第五年級 山 本 繁 七

花の色は褪する時あれども月の光は變らず、虫の聲は衰へゆくことあれども月の色は薄らぐが、上下五千載其間盛衰興亡數限りなくあれども、月は依然として空に匂へり、斯の如き月に對して誰か一種の思想を起し感懷を生せざらんや。あゝ月よ、そのかみ、空は星稀にして風寒きエルザレムの荒野は、今し夜の幕に蔽はれんとするユダヤ寒村の夕、橄欖の葉末を滾る露に碎くる汝が影を眺め、静かに悟りの道を分け行く豫言者の心や如何ありけむあるは、白露野營に満ちて、千里空朗かに、雁影寂しく江に落つる夜半、雲山萬里隔てたる他郷の空に、汝が影をのぞんで、想郷の涙に鏡の袖を絞らし千古の武士が哀情や如何に。昨日迄は漢宮の人かれども、今日は故郷遠く離れ行く胡馬の上に乗せられて、羅の袖に玉の鞍を拂ひ、一歩

行けば一步づゝ都の空に別れ行く時、心は冴えて眠り難き眼に、又と眺めがたき空を眺めて、たづな持つ手も打ち戦く王昭君の胸裡や如何ありしか。又は云ふ所は聴かれず、思ふ所は行はれず、身は三閭の大夫といひながら、獨り徒歩して汨羅の水の邊を狂ひ涉り、天を呼べども天答へず、地を叩けども地答へず、悲しさの餘りに、滿腔の悲哀をあげて、その水に投じたる屈原の怨や如何に？

人間を木石と思ひては、平家一門も恐るゝ所にあらず、言はんと思ふことを云ひ、行かんと思ふ所へ行き、袈裟の姿にあきれて、あさぢふの闇路にふみ迷ひ、露の音もかすかあるところに、怪しき首を透し見て、潸然として落る涙の文覺の顔を照したるは汝か。あるは、人には木の端のやうに思はれながら、早く名利を捨て、昔の袂にやつれ、白糸の染まんことを悲しみ、道の岐の分れんことを嘆き、一生の餘算を山の端の月に數へ、愚かりと云はるゝも聴き入れざりし方丈の主の徳を照したるは汝か。

四顧蒼茫たる海原に身を一葉に委ねて、釣するいざり男も、空に懸れる月の光くまかくて、我に伴へるは我影のみあらんには、流石に竿を投じて腸を斷つ心地やすらん。親に別れ、夫に先きだされたるをやめの、ありし昔を思ひて、空に知られぬ小夜時雨、絞る縋縷の袖に宿る月影は、高樓に汲みかはず杯裡に金波を起す者と異れりや。身には綾羅を纏ひ、頭に、王冠を戴く身にありながら、世を厭ひて宮中を忍び出で、無憂樹の影に佇み、澄み渡りたる月に向ひて獨り三昧に入り缺くるを思ひ滿つるを憂ひ、天地と其の秘密を語り明かせし悉達の心鏡に映りし月は如何ありや、太子去りて殘されし宮人のあげきは、尋ぬるもうしや。

波荒ぶるセントヘレナの孤島の月に、往時の榮華を想ひ、あるは、峯の松風うら寒く、夜禽聲を潜むるとき不圖起る竹笛の音を聞きては、足柄山の昔を懐ひ須磨浦曲の夕風に、衰殘の旅客をのせて、未は烟の潮路を照せし月を、同じ磯に眺めては、青葉の笛に哀れを觀じ、カルセージの廢趾を照せる月に亡魂と語るの情やうたゝ切あるものあらむ。

あゝ月あるかあ、汚れたる現世を遠かりて、幽幻の園に微明の光を與へ、罪ある風俗を離れて神秘ある虚空に安慰の想を示し、蕪穢の下界より凡ての罪障を驅逐せしめて、悠悠天地の心を流る、あゝ誰かはその聖光を稱へざる、誰かはその威靈を懷はざる。月や永遠にして不朽、不滅にして無限あるものあり。花落ち、水流れ人も亦彼等と共に逝く、然るにかの月のみは、浮雲を懼れず、風雨を懼れず、猛雷を懼れず、獨り悠々として蒼空にかよれるされば、朝に榮華の夢を思ひ。夕に衰亡の面影をかんにて、吾等一生は刻一刻、秒一秒、死てふ冥闇の國土に迎へられつゝあるも、彼等は依然不變の光を以て、永久の面影を以て、吾等が悲喜哀觀を照らし、われら死ぬとも同じ光を以て、吾等が墳墓をも照らすものあり。あゝ不思議なるものは月からずや、敬慕すべきは月からずや、さるにても光間は窓を愚實ある肉塊からずや。

初夏こそ所感

第四年級 村上 義一

鳥兔瞬々電光の如く過ぎ去りて、爛熳たりし百花はいつしか散り果てゝ名残り胡蝶の悲みに止め、野山に滿ちし春霞も昨日の夢と晴れ渡り、寒からず暑からず、方には是れ杜鵑初夏を吟するの季とはありぬ。誰か知らん、夏天の裏に葎上白霜を降らし緑樹假枯するの季節あらんとは。また何ぞ知らん、年々歳々花相似たれども人相同じからざることを、深窓に花を賞する佳人も顧みて額邊の波に泣くべく、茅屋に坐しあがら月を眺むる田夫も端かく頭上の霜に驚くべし、坐ろに、青年老ひ易く學成り難しと、吟せられし、朱熹先

生の詩をぞ忍ばるゝ。
夫れ怒濤いと荒き學海に航して彼岸に希望を属しつゝある吾人青年は宜しく寸陰を惜みて日夜勉め勵みて、いち早く希望の光明に浴すべき覺悟をかゝるべからず。夫れ、何ぞ考一考せざる、吾人は日一日墓邊に近づきつゝあることを。

諺に曰はずや、人生五十と、されば吾人は三十餘の星霜を経ば、憐れ一推孤墳の主とあらざるを得ざるあり況んや、萬事宛も花下の酔の如く一生渾て夢中の狂に似たるに於てをや。
嗚呼金龜城下四百有餘の快男子、豈に醉世夢死して可あらんや。

縦横五萬里、上下三千載、茫として際涯を失し吾人快男子の急務何ぞ枚擧に遑あらんや、然れども其本領に至りては一のみ、只確然不拔の氣を養成するにあり。

其れ氣確乎たれば大山前に崩れ、巨流後に漲り、虎豹右に嘯き、豺狼左に吼ゆとも剛乎として介せず、毅然として動かさず、意の欲する所成らざるはあく達せざるはあし、夫れ快男子の本領は氣あるかを、氣あるかを只吾人の覺悟如何にあるのみ。

夫れ氣のものたる養ふに直を以てして是れを害ふことなければ、即ち至大至剛天地の間に窮をけん、將來社界の原動力とあり、國家の中堅とあるべき吾人快男子苟も文を學び、書を繙くの餘暇、須く出でて天真爛熳の間に浩然たる堅忍不拔の剛氣を養成せずして可あらんや。

今や驕陽は日に炎威を増し蒼樹は益々深緑を湛へ、螢群は小川の昏に戯れ夏虫は千草の夕に啼く、吾人養氣の好機これに過ぐるはあし。嗚呼實に熱心に勉むべくして、熱心に遊ぶべきは、夫れ初夏あるかを。

琵琶湖邊に遊ぶ

第四年級 西川 修 建造

梅より櫻と、花鳥の色音に、あくがれし、春も、今日は早や、名残りあくありぬ。
朝ほらけ、寢醒めの床より、庭の面をみわたすに、葉櫻の梢に、うらみあく、鶯の聲も、いと亂れて、聞くさへ、おぼつかあきを、きのふ散りし、花びらの、泥にまじりて、さびしげあり、彼方の竹藪に囀る、小鳥の聲も、早や、夏をかたるらしく、かたへの桃の、紅かりし枝は、早く、青葉しぬ。

思ひ出せば、やよひの始めつかた、かの片田舎に、親しき友垣と、うちつごひて、雲雀の歌を聞き、胡蝶にさそわれつゝ、山ふみせしも、きのふの、夢あれや。

池邊の、かきつばた、白く紫に、咲き出で、汀の山吹、えいはぬ、色に匂ひ出で、をりく、水に、こぼるゝも、つごうるわしく、庭石のかけあごに、丹躰の笑ひ初めしも、いと、まてがたき、あがめあり、小雨そぼふる、夕ぐれは、蛙の聲も、いとものかあし。

日頃の雨に、學びのわざも、うみぬれば、むあしく、やむを待ち居しに、今日は天氣麗かにして、少しの風もあく、山にや、のぼらん、野にやあそばあんど、思ひ居ける、折しも、日頃、親しき、學びの友二三おどづれ来て、今日は、いつにたく、日和らかく、吹きかふ風も、いと、のどかあれば、野山に、遊ばむも樂しかるらめど、濱への、けしき、また一しほどの噂あれば、これに、行かんこそ、中々に、まさりつらめ、いざ君も、共に、來らずや、いかにと口説き、すゝむ、おのれもとより、望む所あれば、こよあう、よるこびて、出でたちぬ。

午後二時頃ありけむ、目ざす琵琶の湖邊にぞ、着きにけり、さらでも、いとおかしき、眺めあるに、今は風

しづかにして、ちみもたえず、見わたす限り、すうく、濃く、霞のたちこめて、竹生、沖、あごの、鳥々、おぼろ／＼ある、言はん、かたかし、あまたの、大ぶね、小舟は、沖のかあたに、打ち浮び、そが中に、いと白き帆の、二つ三つ、まじれるさまを、書にも、うつさまほしき、あがめあるに、水鳥の面に浮ぶまごこと／＼に、目をよろこばす、景色あれば、友も、おのれも、歌よみ詩よみ、おのがじよ、打ち興じ、石おご、あびて、彷徨ふ程に、折しも、あかたより、わらべごもの、うちつごひ、手には籠を、たづさへつ、肩には、竹竿、荷ひつよ、樂げに、語りて、こあたの濱へと、歩み來るさま、いとめでたし。袂す、しき、夕風に、衣の裾を、おほらせつ、あちこちと、足に、まかせて、漫ろに、歩みけるに、夕日の光り、水に輝きて、黄金の波、遠く、真帆のかす／＼、礮山さして、歸るさま、いとにぎわしく、あかたの礮邊に、賤が男、賤が女の、數多つごひて、手足鋤鍬洗ふまご、夕の礮景色こそ、妙ありける。小歸るさま、知らで、興いよ／＼、深く、あり行く折しも、時告ぐる城山の鐘の、霞む青松の間より、七つの音響き渡るにぞ、常には、文みる窓に、長々しう、思ひてし初夏の、日影の分きて、けふは、短かくあむ、思はるゝも、おかし、あかぬ心を、あごにして、家路を、迎れば、夕日の影、おぼろに、さして、小田の蛙の、あきたつる、また、あはれに、うれしうこそ。

翁

第四年級 炊殿雄一郎

雪深き北越の空、怒濤荒ぶる日本海、其要港として知らるゝ敦賀港、名もやさしき曙町とは、我が幼きときより、住みおれし町にぞある。その町の中央に、水夫の翁と呼はるゝ、白髪のお翁、住みてけり。我が七つ

の時の夏かぞ覚ゆる、降り續きし五月雨も已にやみて、いと麗かある朝日影、松の青葉に、輝きて、何ぞかう長閑ある春の日の、再びたち歸りけむ心地して、嬉しどもまた嬉し。さて此の水夫の翁とは、たくましき男にて、嘗て十幾年の間、日本海の荒波に、ゆられ／＼つ和船に乗り、航行を業とし、函館と此港との間を往きかふこと數限りなし、舳うつ波の花を眺めては、都の春の櫻とも見あるは北海の空に、物凄う懸かれる弦月を仰ぎては、都の秋の月を思ひ、憂き年月を船に迎へて、船に送れりと云ふある。今はこの曙町に、雨の朝、風の夕、老ひたる瘦軀をやすらひ、彼が餘命を送りつ、常に小兒を集めて、己が經歷の物語りおごしつ、長き月日を消しぬ。この日も常の如く吾等を集めて、例の物語りに、打ち笑ひ、打ち興じつしてけり、寄る年波の額に見えて、幾重の皺に旭日をうけ、小庭の椽に吾等を座せしめ、にこやかある笑を滿面に湛へてさて語るやう、實に人の謂ふ親不知の險、風荒き北海の波に、一夜を明かし／＼ことありき、御身等も定めて聞き及び給ひしあるべし、親不知とは、子さへ我身の危きに、親の危険も打忘ると云ふある、懸涯萬丈、奇礁亂立し、白波怒つて身を襲ふ所あり、吾等は其前日新瀉を船出して、順風に帆を張り、波浪を蹴て、眞一文字に伏木をさしてぞ進みける、もとよりその夜は、風も吹きすさばむとは期せしかど、こは最急の用達、かの函館のさる商人に頼まれて、辭みもえやらで船出せしが、吾等は實に向ふ見すの業してけりと、いたく心をいためつれど、今更詮かきことありき、吾等同船したりし五人親不知の險にかゝりしとき、此處は名にし負ふ難所あればとて、いづれもつごめて警め居たりしが、あかたはれ、親不知の沖五十町のところ、名たゞる一の淺瀬ありて、船は端かくかのかくれ岩に乗りあげ、舳の方より、二つに裂けぬ、艦に在りし吾は、異なる響と諸共に、山を浪間にあげ出されつ、他の四人は如何せしが、定めて魚の腹に葬られしにやあらん、今にその便りを聞かず、雁の啼く音を聞くにつけ、月のさやけ

きを見るにつけ、忍ぶ涙の露深く、いと、あはれを覺ゆあり、されど吾は、運や拙みからざりけむ、如何せしかは覺ぬねど、一時計りも過ぎて、大なる岩を抱き居たりけり。
 その夜は月もいと暗く、星の一つも輝かで、一夜は波に洗はれつ、かくてやうく陸に上り、夢にはあらぬかと、思ひながらも岸傳ひに、さる漁村につきぬと、白髪は粉々として亂れ、爛々たりし眼光もいつしか涙にうるほひぬ。

物變り星移りぬ、吾は今已に近江に住む身とありて、十年に猶一つの歳を重ねてけり。
 眠り難き晩春の夜半、我が舍の窓に空しく北越の空を仰き、過ぎにし昔の偲ばれて、いとあはれあり、あゝ水夫の翁よ、幸よき翁の生涯を楽しく送れよ、吾は昔の吾あらねど、又來む暑中休暇には、いと面白き物語りに、昔の吾にたちかへり、幼き昔を偲びあむ、あゝ翁よ、あゝ翁よ。(完)

晩秋の野邊

第三年級 野間 莊三郎

梧の一葉に秋たちそめしは、はや幾日のむかしありけん、庭の白菊いまをさかりに、こほろぎの聲をほそかる。小窓をひらいて野の面を見わたせば、まぎにし日まで、さながら黄金のごとき波をたてたりし稻の穂のかば蒔りとられて、竹竿の上のうちかけられ、農夫はわかき老いたるうちまじりて。蒔りいれに餘念あういそしめり。こゝ荒れ庭のかたすみには、南天のもよの赤きが、ふさくどうあだれて、かはゆき鵜のついで

ばむにまかせるあんど、何れかたのしからざるはあき、まいて、狭霧こめたる野をもせに、光明の歌誦しつとさまよひあはば、あゝ、いかばかり心ゆくことあらんと、スチツクとあけて、いづくともあうそゝるありくに、賤が伏屋のやれ籬には、烏瓜の三つ二つ、黄菊白菊みだれさき、村はづれの水車小屋には、ゆるやかにめぐる車のはきいだす水の、さゝやか音たてゝあがれゆき、それにそうて紫の襷したる少女兒が、一籠の赤芋をあらへるが、さらく日かげにきらめくほとり、燃ゆるごがとき紅葉の枝たれかよりたる、しかもそがあたりのはね釣瓶に、一羽の小鳥のみづくりつくらうて、われは顔にさへづるあんど、さらでだに心やりあるかがめあるを。

この詩境をたちいづれば、道のかたへの松の幹に、火をはく蕨のからみつけるは、燃えたつ心をみせんとにやあらん、オレンジ色に葉をそめあして、熟したる柿のあかき珠をつりたるに、眼白鳥、百舌鳥あごのあきわたりたるもいと興あり、そここくに人待ち顔してまねぐ尾花のいとをかしく、一本の女郎花のあよくと風にゆらるとまたあはれ深かり。

さきつころまで咲きみだれし千草のはおも、虫のねのほそるにつれて、たゞ一も二もとの草花に、のこんの秋をかたるのみ、さりながら、心あき草木もとの思をふにや、葉末における白露のいとおもげある、あはれやさしき情はありけりあ。

やがて、とある小川のほとりに出づ、白き石橋をかけたたり、濃の藍をあがしたらんごとき川水の岸には、燕子花のくるひざき、紫の花一つほのかに匂ひぬ、あはれ心ある人にみせばやとぞおもひし。
 むかふの岸に一むらしげる白萩の、残んの香をしたふて、一つがひの白蝶、空をまふにや、花にくるへるにや、みれば花はらはらくと、河水の上にちりて波紋をえがきしが、しづ心なく流れゆきぬ、かくあること

二たび三たびありき。白蝶よ、いざ言とはんか、汝は明日をもしらぬ露の身もちて、何をたのしみて、かくはまふぞ。にくや一しきりの寒風、さつとふきつくれば、残んの萩の花、散るは…散るは…雪のやう、河水の上にはら／＼と。こみれば蝶のかげまた見えずありぬ、げに雪とみしは彼が翅ありしよあ…さありけるか、水のまに／＼流れゆくは…たよふは…あはれ翅をやぶられたる彼のあきながら、遠き黄泉の國へこそおくらるゝかれ。あはれはかきものは人の世あり…すしき、この秋風も、やがて常なき風の、さそふとこそしれ。

初 夏

第三年級 徳

永

英

咲きみだれたる庭の櫻も、きのふの嵐に花落ちて、梅が枝に春の歌うたひし鶯の聲も、やう／＼稀にありければ、賑はしうきら／＼かありし春は暮れ果て、凡ての景色は、あつかしう物きよげある夏さかばかりぬ。今日しも、余りにうら／＼かある眺めあれば、たれこめてのみあらんも物たらぬ心地をするに、かしこく漫るあるきして、この半日を野邊に暮さんには、如何に心行く事やらんと、身したくもそこ／＼に、午後三時といふに柴門を出で立つ。事しげき巷をやう／＼はかれて、折り曲りたる草深き畔道を辿り行けば、この面かの面に茅ぶきの家の、まばらに立ちたる、まづ見る甲斐あり。そか垣根の卯の花は、さながら雪かこあやまたれ、首うかたるゝかるかやの、もの思はしげあるもいと面白し。吹く涼風に青波たつ菜種田の、彼處此

處に咲きおくれたる花の一輪、二輪、春の名残を止めたらんやうあり。何處の家も、皆戸閉して出でたりしにや、かあたこあたの田の面には、あやしげに頬かむりあごせる男女の、老ひたる、若き打まじりて、あるは半牽くもの、あるは早苗取るものさごの聲高に笑ひごよめき、鄙歌うたひて、蛙の聲も興を深へ、白き笹の色は、早苗の緑と彩りて日に輝き、景色いと麗かあり。すしげある柳の小陰にまごるめる幼子は、今如何なる夢路をたごるらん。吹き來る風はやをら彼が無心に寝ぬる頬のあたりを管めて行く。

この美はしき景色に、われはさながら酔ひたらん心地して、猶も西へと歩みを運へば、路は次第に悪しうありて、踏みしむる足も何とあう危うげあり。右に左に打つ／＼麥生の間を、かあたこあたに舞ひ狂ひし一つがひの胡蝶は風のまに／＼揺られつゝ飛びかひて、力をげあるさま、又かくあはれあり。進み行く程にやがてわれは鎮守の社に出でぬ。嚴めしき鳥居くゞりて、小暗き迄にしげりたる森の中を過ぐれば、梢に鳴く蟬の聲もいぞかすかにありてあたりの静けさは又云ふべくもあらず。前を流るゝ小川の水は、さながら藍を流したらんが如く、川端の一本柳は和風にあびきつゝ、優やかあるすがたを水の面にうつしたるは、天つ乙女の鬢のほつれ毛撫で上ぐる様にも見ゆて一入をかし。

かくて橋を渡り、この鳥居も過ぎて神苑に入る。心地よき迄に掃き淨められて、心にかゝる塵だにたく太しき杉むらの中に神々しき社殿のたてる、わきてゆかし。しばし階前にぬかづきて恭々しく拜を遂げ、やをらし身を起して宮の後にめぐれば、葎さごの生ひ茂りておほひかゝれる古びやかなる池あり。水濁りて泥深く、汀に咲ける花あやめ、露を帯びたる蓮葉さごの風にゆらめく風情、すしとも涼し。蛙の、人の來るけはひに驚きて池の中に身をかくし、或は、蓮の浮葉に身をおきて、所得顔に王侯を氣取り居るも又可笑し。あたりの松が根に腰おろして暫し安らひつ。折しもささ吹く風に送られて、御山の鐘の音、高う、低う、六

時を告ぐるに打驚かされ、元來し路をたどりつゝ家路につきぬ。夕ばえの日光は華やかにあたりを照して、山も、川も、草も、木も、さてはわが纏へる衣迄、皆紅の色に彩られてうるはしうかがねの光放ちぬ。やがてそれも、森の蟬の夕べの歌を終るごとくもに、やう／＼淡らぎ行きて、まんまろき日輪は、見る／＼湖の西の、山の端にかくれぬ。世はたゞ夜の黒膜に掩れて、家も森も、黒き影法師とかはりぬ。蛙の鳴く音、静かある天地に響きて、いと喧びすし。

辿り／＼ていつしか平田川のはざりに出でぬ。書きたらんやうある川柳の、夕風に靡ける様の得もいはれぬに、あたらしい景色を捨つるも何とあう惜しうて、やをら橋の欄干に身をよせつ、そこて／＼と眺むる折しもあれ、彼方の空より消えつひかりつして、あるは早く、あるはゆるやかに、飛び來るは螢よあ……と見る間に又二ツ三ツ加はりて、果ては彼方にも、此方にも、いと多く飛びかひぬ。

草はらに遁れ行くものは人だまの如く、大空に飛び行くものは、流るゝ星のそれにも似たり。あまりのうるはしさに、夕食のことも打忘れて、『螢來い／＼……』と叫びつゝ、散りては群がる金色の光りを追て、そこはかどあくあせりありく程に、いつしかわが手にせるあやしき袋にも、うるはしき光りの幾つとあう加はりければ、これのみあげにと、このあかぬ眺めに名残を惜しみつゝ見返りがちの、家路につけば、夕月の陰さやけくして、小田の蛙の聲あはれ深し。

雁がね

第三年級 徳永英

秋の夜の、いたくも更けて、木の間漏れくる月の光り物凄く、庭の面を照しつ。

寝られぬまゝに伏床立ち出で、眺むれば、折からと吹く小嵐に、庭の呉竹あやとげある音立て、はら／＼と散る笹の葉の四ひら五ひら。後は又虫の音のみぞかまびすし。澄みたるころの、いやにすみまさり行きで、思ふともあくありしことゝも繰りかへして、昔を忍ぶ時しもあれ、天を渡る雁がねの、二聲、三聲、あはれ汝、知るあらば告げてよ、故さこの懐しきはらから、さては戀しき友垣は、暮し難き今日このごろを、如何にか過せる、恙かくてや、障りかさか、やよ雁がね。

思へば早や三年の昔、世は陽炎のうら／＼かに、心行くべき中春彌生の半ば、緑したる鎮守の森、前を流るゝいさ／＼川、さては住み馴れし我家、床しき青山を捨て、われは唯ひとり學びの海に漕ぎ出でぬ。それよ今宵の月にやいやまさるうるはしき希望の光りに照されて。されど、あゝされど、如何せん月日の小車のめぐりめぐるに打ち連れて、さやかかりしその光りも、魔雲のためにやう／＼淡れ行き、果ては浪風穩かかりし學びの海には、見る間に荒浪打ちたて、あはれや我身は狂ひに狂ふ怒濤のまに／＼、ゆられ／＼て何時覆へされんも知れぬ果敢あきの身ごかりし口惜さよ、そを想ふにつけ、一入故郷の空の慕はしくて、人こそ知らねあつき涙に袖濕はしよは抑も幾そ度ありけん、ことわりや、焼野の雉子、夜の鶴さへ、あほ子を慕ふものと聞けるを、ましてや血あり涙あるものゝ、戀しき故郷をおもふころの、いかであかるべきやは。

數ふれば早や幾年の昔ありけん、あどけなく、罪なき學びの友と打連れ、程遠からぬ野に遊びて、春をらば亂れ咲く葦の花を摘み、秋のこの頃からんには、桔梗女郎花、さては露に濕める白百合を、思ひ／＼に手折りて共に楽しく賞で、あるは、又、睦しきはらからに伴はれて、草野川のはざりにあくがれて、夏は涼しき川端の柳の影に、清き流れにすがたうつせる月を眺め、冬は降り敷ける白雪に包まれて、優やかに彩らるゝ景色に見惚れしことかどのありけるが、あはれ、その野邊は今も昔のすがたを止むるや、草野川の水は尙

古への調を違へざるや、懐かしき同胞、慕はしき友だちは健かに暮し居ませるにやと、それよりそれに打つべく胸の思ひに、あはれ亂るゝ我こゝろかあ。

實にや、朝の風に散る花びら、夕の雨に落つる木の葉も、故郷にありてこそ、面白くも見え、楽しくも覺ゆるかれ、あはれ、數多き山を越え川を隔てゝ、こゝ故郷遠き羈客の窓にある身には、かへりて其が物思ひの種とかりてありし昔を思ひ出でゝは、果敢なき今の身の上に歎たれて、思はず熱き涙に袂しぼりつ。

城山の鐘は、今しも三更を報じて、夜はいたくも更けぬ。仰げば、高きみ空のたゞ中にかゝれる一痕の月は静かに下界を見下して、さながら我をあはれむものゝ如く、草葉にすだく虫の音は、あやに細り行きて、一入あはれ深し。如何にしけん、われは俄にねやの衣の裳寒う覺ゆるまゝに、やをら伏床に入りしが、さまざまの思ひに心の緒の亂れゝて、今は中々に、睡られず。折しも、梢を吹き鳴らす夜風の絶えゝに、又も聞ゆる雁がねの聲、あはれ今宵は誰が玉章もたすらん。

彦根城

第三年級 西澤 徳治 郎

花ちる春の名残、虫啼く秋の別れ、げに變り行くは世のからひにて、いつ迄ありと頼むべき、昨日はさかへ今日は衰ふ、さながら水のあわ、草の露の如し。

われ去ぬる秋、一日、親しき友垣をそゝのかし、城山に登りぬ、こは今より三百年前、井伊直政公の築きし所ありとか、今は昔のすがた少く、形見にのこる石垣も、苔むす色くろく、葎生ひ茂り、風にそびく旗すゝき、草葉にすだく轡虫にも、ありし世のむかしを、おぼゆる心地をむせらるゝを、折から吹き渡る松風は、

矢さけびの音かと聞えて、ことさらあはれのいやまさるゝにあむ、よもに繞れる堀は、むかしのあと、それかあらぬか、今にのこり、千歳ふる老い松は、道をふさぐばかりにて、木の下蔭にたゞすめば、葉末に宿す白露は、はらゝと落ち來り、袂をぬらし、猶も追懐に沈みたり。

歩みを運ばせ、内壕に架したる橋を過ぎ、頂上に達すれば、天主閣の高う聳ゆるあり、見れば世をふる雨風にさらされて、蕪やぶれ、其上には秋の草、所々に生ひ茂り、いと物ふりて殊勝あり、こゝも昔は、數多の猛きよろひ武者が、水のたるやうある太刀佩き、居ませしかと思へば、そゝろ此身も勇む心地をむせらる。

* * * * *

天主閣の頂上に登り、涼しき濱邊の夕風に吹かれつゝ四方を見渡すに、前面は、一帯茫々たる琵琶の湖にして、磯なれ松の梢にそよぐ風瑟瑟々、水鳥の聲淋しく、みぎわに寄する白浪の、寄せては歸す音高し、ふはりゝと黄金の、浪の上を行きかふ、真帆、片帆、さながら鷗のそのやう、多景島はうすく、遙に見え、竹生島は、遠く右方に菅笠を伏せる如し、湖西の遠山、さながら薄藍もしばかしたらむ如く、高く、低く、ああるかあきかのやう。

あゝ！純美ある自然よ！高潔ある湖よ！たとへ、濱の真砂は、つくる事あるとも、吾は、獨、汝を忘れじと其時、恍として、ごつかと、腰を下して、一種のインスピレーションにうたれ、身は早くも、塵深き此世を脱し、錦の雲にうち乗りて、けがれなき、清き天國に逍遙ふ如く思はれぬ。

やがて其が美しき詩景は、日の神の餘光を浴び、赤く、黄く、はた葡萄色に、山に、白帆も、菅笠を伏せる如き島も、林も、漁村も、我身まで彩色され、はては、一分は一分と、日光の薄れゆくと共に、夕霧のうす

絹に包まれむとせ、
今はこれ迄と、立たむとする一刹那、晚鶉一聲、はつと思ひて仰げば、その影だにちかく、折からひやく、御山の鐘の音は、秋の衰れをつけ、一輪の明月、今や雲間をはかれ、歸路を照らさむとす。(終り)

四季の月

第三學年級 西澤徳治郎

月は十五夜いみじうさやかあり。彌生の月は、影さへかすみて、何處も同じ花盛り、高く馨れる白梅の、清きが、月影浴びてこれに風情を増され、或は櫻咲きそめて、おぼろに香ひたるは、夜櫻とて、一入もてはやさるゝもうべにこそ。

ふみ月の頃は、暑さ堪へ難く、夜に入れば、蚊等出で来て、ひとしほ苦しきに、團扇片手に、小川をたどり行けば、草叢には、ほたるの光を放ち、星の水面に、うつれるかと、あやまたれ、もえそめし柳の糸に、月のかゝれる、見るからに涼しくおぼゆるに、風のそよ／＼と袂を穿てる、限りなく心地よし、わが影法師のいと長く怪しく思はるゝに、水には樹影倒に映り、夢を結べる小魚の五つ六つ、月の光に數さへよまる。

よみち月の頃は、長き夜をかたてる虫の聲々、あはれあるに、月の高ふ牙の渡り、折から雁の三つ四つ二つ過ぐるもこよちう物淋し、松風とばかり聞きわたさるゝ爪音は、如何なる人の調ぶるにや、いとどあはれをもよふさる、籬が下に、香りゆかしく咲き匂ふ白菊の、月の光にびとしほ白く、白金の花かともあやまたれいひ知らず氣高きに、此處、彼處、まだく虫の、二つ三つ、いとをかしう聞かる。さる程に木枯ふきすさぶ、冬來れば、水鳥の聲もみにしみ、池の面にこほりてすめる月の、人目もまばゆく

さすがにものすごう思はる、あるは、霜枯の野邊、遠く月の影すごく冴えて、夜寒に狐のかく等、さすがに物すごう思はる、すべて四季折々の月ほど、あはれに優るはあらかし。(終り)

夏の夕

第三學年級 芝原岩次郎

「炎天に火を吹きさうあ鬼瓦」とはいにしへの句あるが、げに暑さたへがたき夏の日も、夕立すぎしよりはいとど涼しくありて、はや暮れ方とありければ、ゆあみをはりて、夕食をどすましいぞ納涼せばやと、そこはかとなく、小田の畦を辿り行けば、道の邊の若草に宿れる玉の露美はしく、いさゝ川の柳の糸をぬひゆく螢二つ三つ、見えつ隠れつるあど、えも云はれざる景色にて、賤が家より白く立ち昇るは、蚊遣する煙にやあらん、團扇あげつと、うゐる等が「螢こよ／＼あちらは田圃、こちらは清水」をどと樂しげに謠ふ聲も、こゝかしこに聞えて、いとゆかし、心ともかく里川堤に沿うて下り行けば、川邊の卵の花風にかをり、青田の稻もみどりふかきに、小田の蛙もあきしづまりて、あたりいと淋しうありたる折柄、そこもわかす鳴く水鶏の聲のきこゆる、又ちくをかし、折しもあれ、大きやかある螢一つ身まかりし弟の奥津城のあたりを二たび三たび覺つかあき光もて輝せる其が魂とも見えて、いと悲し、

おゝ螢よ、汝は夜ごと麗はしき露やどしたる青田の面にさまよひつゝえたへぬ晝の暑さもしらす濁れる浮世の塵にも染まず、あゝ如何ばかり汝は樂しがるらむ、されどその樂も一たび秋風の吹き渡れば、朝にささぐにの糸にかゝり、夕に草葉の露を消えて、あへなき最後を遂ぐべければ汝の末路、あゝ我に一掬の涙をがらすやは

されどこは汝のみにあらざるよ、思へば今は昔三年の夏までは夜をく親しき弟と手に手をとりて、希望の星も輝くてふ夕べ、また月影を宿しやらぬ稻葉の露ふみわけつゝ、汝の姿をかめては、俱に歌唄ひ、汝を机邊に伴ひてはもろともに車胤の昔を習ひしこの幾夜あるも南柯の夢あれや、あゝあつかしやその弟は、今は呼べども歸らず叫べども聞えぬ幽明界を異にする遠き旅路に趣けるよ……

されど汝のみはあほこそも變らず、嬉しげに風に舞ひ闇をぬひて、いとも樂しげあり、あゝせめては汝れを亡き弟の靈とも見んか、あゝ離恨綿々胸にわきいでえ堪へぬ悲しみを覚えし折しも闇をかすめゆく不如歸二聲三聲、あはれ血にあくものは、汝のみかは……

翁

漁りの翁

第三年級 田中時治郎

長きしのべの竹、一すじのすが糸に、細き思ひを托して、魚籠腰に下げながら、曉の星をいたゞき、夕ぐれの鐘を聞くまで、葦間近くの小石に踞みて、浮木の小片を睨みつゝ、雑魚、小鮒、さては沙魚はせうぎょあど、魚籠の半ば充てゝ、けふ一日の業を終へけりて、湖邊をたゞりて家路に歸る。

あゝ漁りの翁、何ぞ、その生涯の安らかあるや。

新緑、色濃やかある初夏の頃、湖邊を歸り行く彼等の影の、さても雅やかあるか。

別荘番の翁

何々伯、何々男の別荘の一間に、主人公避暑に來り給ふ頃までは、庭の掃除に、廣やかある構へを我家の如く、松の葉一筋も庭の白砂にのこさるまめやかあるはたらき振り、十年一日の如く立はたらき、花の御江戸より來り給ひて、一言のはめ言葉に、額によるこびの波をたゞふ。すあほあある心は、門前の真砂に、箒の目の正しきをもて知らるべし。

多景島の紀行

第一年級甲組 山田武治

予嘗て多景の勝に接せんと欲して、未だ果さゞりき、盛夏一日學友約して、彼處に至らんとす、即ち水上部の許諾を得、比叡の端艇を整へて、乗り組みぬ、櫂は鳥の翼の如くして、水面に浮べり、やがて用意一聲の合圖と共に、櫂は水煙りを揚げて一齊に水を打ちぬ、一上一下整々として調を亂さず、矢の如く進み行く、いつしか渥を出で、湖上に至る、風波至つて穩に、恰も席をしけるが如し、白帆點々として、一葉の波上に浮ぶに似たり、遙に見渡せば、多景島は黒點の如く、鏡の如き湖水に日映じ浮光金をいき踊らす、近づけば彌々大きくして、吾等の喜び大かたあらず、既にして島岸に達す、島は悉く岩石を以て圍まれ、附近水深くして、千尋の碧潭藍に染めり、艇を止めて、島り登り、細道を辿れば漸くにして、頂上に至る、あたりに見塔寺、鐘堂七重の塔等最と古めかしく建てあり、まはりには竹林繁茂し、晝暗く夏寒し、轉じて蟻の戸渡とやらん名づくる、嶮しき岩上を過ぎ、北方に至れば、石の鳥居ありて祭れる神は、此寺の鎮守ありと、數多の奇石怪巖屹立し、老松其間にわだかまりて、水と翠色を争へり、枝幹湖風に吹き撓められて、或は龍の昇るが如く、或は臥すが如く、千態万狀いよゝ極りあし殊に人々の注目するは、東面して立てる、縦殆んど三丈餘横一丈半餘の秀石に、南無妙法蓮華經、の言句刻せる靈工に、驚かざる者あかりき、怪石に腰を諾して

息ひ四望すれば、湖畔二帯は山脈蜿蜒として長く連る、衆山は海上に狂瀾怒濤の起れるが如し、東は井伊氏の城郭に臨み、西は比良の峯巒に對し、南は荒神山聳立し、北に竹生島等ありて、此風光實に、多景島の名稱こゝに起因するあらん、時に美風徐ろに吹きて神氣自ら爽快かりこゝを辭し島を廻る、湖上只粲然たり、時將に金鳥西山に沒せんとき、友人相促して歸る、我寓に達せし頃は、黄昏人面をも分ち難し、時に七点鐘、今目前たりし、絶佳ある景色、心残りて忘るゝ能はず、旅装を改めずして、燈下に筆したるにこそ。

竹生島紀行

第一年級 井口哲宗

維時、卯の月末つかたにかん。四方山は、霞の衣に蔽はれ、清く晴れ渡りたる青空に、雲雀さえずるいと長閑あるかがめあり。この好き日にあたり、余等が如き未來多望の青年、何んぞ、鬱々として暗室に獨居ざるを得んや、何んぞ、天然の勝景を探りて、日頃勉學の鬱氣を一掃せざるを得んや。於是、學友數輩と共に、時の輕装とてのえて、卯の刻すぐる時柴門を出でつ。道の程は、約、一里もやあらん、東風にさゝみよする琵琶の畔にぞいたりける。こゝに輕舟をやとひて、漕ぎつ、浮びつ、行く程に、いつしか湖のまかかおほぼしきにいぬ。あづまの方をかむれば伊吹、七尾の連山は、かすみのかかに埋もれ、西浦の諸山は、はるかまゆすみをこらし、海のかあたこあたに、霞の中を真帆片帆の浮ぶもいと面白し。かくしてつきぬ景色を眺むるうち、いつしか綠色瀟らんとする、竹島にぞ着し居たりける。これよりわが一行は、登島してあまたの磴を上るに、いとけわしく面をかすめて累列せり。登りつむれば一大堂宇の壯嚴あるあり。これかんで久夫須广神社にして、辨才天女を祭れりとかや。拜禮の後、二三の神社に參詣し、遂に島の南面ある、宮崎

と云ふに到りぬ。こゝは島のたゞすまひ、いと面白く、水またきよく、崖にかゝれる小松の伏して、水を畫ごるあり、仰いで空をあやすあり。海のかあたをみとせせば、奥沖の間は、鵬程、万里一の障物もなく、多景、白石の諸島の間を、小舟の行きかふもまたよし。かくつきぬ眺の中に、携ふる行厨を食し畢りて、もどきし道を引きかへしつ港に出でぬ。これより又舟に乗じて、島の西に周れば、奇巖屹立し、或は渴驥の湖に飲むが如く、或は臥牛の道に横はるが如きあり、又、自らうつろとかりて波浪に濯はるゝあり。西北には行者穴とて、神垣の龍宮につらあると云ふ穴あり。又北に繞れば、樹木のいたく繁りて水と緑を争ひ、遠くかたのくがには、葛尾崎青く突出したるほど、實によき眺めあり、これより東に進みて小嶋との間を過ぎ、遂にもとの港にぞ着しける。折しも金鳥は西山にかたむきたれば、やむなく愛をさきて、風のまに〜帆をあけて、樂しき話のつきぬまに、いつしか岸にぞつきにける。(完)

湖畔の散歩

第一年級 奥居重能

春も漸く過ぎて世は早くも新緑滴る初夏とはありぬ。一日心地よき好天氣あるに、書見にも倦み初めたれば暫し散歩せむとて立出でつ。先づ芹川の堤を下りて琵琶の湖邊に辿り着きて眺むれば、西江州の諸山、装をこらして鏡の如き水面に倒影を浸し。油の如く静かある波上には、白帆點々去來して、漁夫が櫂を操りつゝ、諸舟唄面白く、打寄する小波の音と合して、恰も天然の音楽の如く聽かれぬ。

かくて厭く事しらの好景に、我身を忘れて眺め居たりしが、西風一陣颯と渡ると見る間に、怪しき雲の忽ち擴がりて、沖には白浪凄しく跳り、急雨篠を衝くが如くに至りたれば、驚ろきて、一散に我家を指して駆け

戻りぬ。
あはれ世の様は、皆かくの如きか。千里を照らす月影は浮雲に蔽はれ、薫れる花は心あき山風に吹かるよぞうたてき。浸れ鼠の如くありたる我衣を縫りつく記し了れば、前の雲雨は既に去りて、夕陽眩く西向の窓に映れるを見る。

漢詩

春江

第五年級 中村 竹坡

望入桃花岸。白鷗江上春。水嬉柔送艣。不識是何人。

春日閑居

桃花千樹小仙寰。黃鳥綿蠻意自閑。日永春窓無一事。長陰抱膝獨看山。

客中遇秋

第四年級 飯村 吳山

金風颯々客心愁。况在候蟲頻報秋。此恨此愁向誰訴。惟看山月曲如鉤。

過古戰場

紅牡丹葉幾春秋。古戰場頭不耐愁。遺恨千年猶未盡。雨風蕭々鬼啾々。

新體詩

琵琶湖の西岸に旭光を仰ぎてよめる

特別會員 澤村 胡夷

夜の領平和にみつる、
湖面を終夜守りて、
葦の葉に一夜のあさけ、
あかつきの寒風立てば、
亂れ散る露にくだけて、
大空にぬか星淡う、
力無き吐息ぞつける。

長良河、岸の柳に、
あたゝかき陽光や投げし、
湖の國、東のさかへ、
白雲の高嶺はそみて、
ゆかり色、紅にぞもゆる。
人の身の情のかげか、
湧きかへる雲の姿よ。

七十里、浪は静かに、
 水烟、空にぞこむる、
 湖沿のあがき砂路は、
 松原の彼方に見えず、
 水鳥の夢や破れし、
 あしの葉に風を起こして、
 嶋影に行方も知らず。

星影はいつしか消えて、
 紅の雲湧き立ちかへり、
 朝風の葦間を吹けば、
 湖は黄金をそめて、
 一つづつ白帆の影を、
 曉の湖にぞ忍がく、
 陽の光よ、自然の畫師よ。

琵琶の湖、西の岸ある、
 苔ふりて冷えにし巖を、

いきごほり思ひにもゆる、
 あたゝかき胸にいだきて、
 曉の空、高くぞあほぎ、
 いとふかき嘆息に沈む。

人の世の道教すたりて、
 光明かき闇にはすすぶ、
 『偽善』のあやしき風に、
 『富貴』『門閥』、『ほこれる権力』。
 かくて、あゝ、正義は亡せぬ。
 永久に照らせる月は、
 紅の歴史を語る。

花草のこぼるゝかほり、
 蟹の子が高きに酔ひて、
 野の水のにごれる末に、
 流れ行く淵瀬を知らぬ。
 見よ、蛙、水草に鳴けど、

乳飲む子の小石にをちて、
泥ふかう隠れて出でず。

美はしき聖賢の教を、
眉あげて囚獄に説く子、
汝の骨、五金に買はむ、
死馬の骨、五百の黄金、
されど汝が肉はけがれぬ、
かくてその骨もけがれぬ、
さらばそは、骨炭の値にぞよ。

竹生嶋、輝やく薨
幻ろしの榮華の夢と、
五百年、歴史に見すや。
『旅に病んで、夢は枯野を、
かけめぐる』吟のあとに、
寂まくの影に非らずや、
げに湖國、歴史に富むよ。

花ゑまふ壘のあとに、
英雄を語る子あれど、
露や散る小松の木かけ、
ふるふ指、額にあてよ、
人の世のけがれの姿、
人間の奇しき運命に、
やつれたる人の子ありや。

おほうみの底に沈みて、
旅人のけがれの足を、
水際に洗ひうべくば、
軀を投げて水かさをまさむ、
あゝされど、瘦せし此身は、
運命のきづちにせかれ、
あさましや、そを、今、得ざる、

友、三年、寺にぞ入りし、

春の夕わが影ふみて、
あやしみのかゝやく眼、
わが面のやつれを泣きぬ。
驚ろきに三步退さりて、
『三年見ぬ、面輪のやつれ、
わが友よ、いたづき得しや』

『汝よ、友よ、正義のいくさ、
人の世の汚れにそみて、
見よ、三年、この背のてきす、
わが頬の肉はくぼみぬ。
額とづる憂ひの雲や、
迫害の苦しき胸に、
許せ、君、泣くに得堪えぬ』
人の子の吐息はやがて、
紅の血潮と化して、
いきごほり、胸にぞもえむ。

いまのぼる朝日のかげは、
雲裂きて水面をてらす、
あさあけの湖の光景は、
平和のおもひにみつる。

湖沿ひの伏屋のけぶり、
朝日さす小窓をおして、
天つ日にぬかづく人よ、
永久はに静けき湖の、
曉の水際にたちて、
平和の思ひを得ずや。

いきごほり、血潮は冷えて、
平和は胸にあふれぬ。
さらばわが湖國の山よ、
さらばわが湖國の水よ、
わが胸に平和をいただき、
あたゝかき陽光をあげて、

しばし、休息やすみの甘泉あまきみ、酌しやくまむ。

和歌

松下泉

特別會員 艾山居士

水むすぶ袂に風のかよひ来て涼しさあかぬ松の下かげ

雨後月

夕立ちのはれて涼しき我庭の草葉の露にやとる月かけ
雨すきてのべに流るゝ川水に浮へる月のかげのさやけさ

初秋風

散りそむる桐の一片に秋來ぬと告げてけるかあ今朝の初風
心あき身にも秋ぞと知られける萩の葉そよぐ今朝の初風

うた十首

第五年級 山本香雨

春の野

かへり行く繪日傘一つ又一つ菜の花ぐもり川ぞひの道

夕がほ

門近きいさゝ小川の薄月夜馬洗ふあたり夕がほのさく

磯でら

磯寺の夕べの鐘の音たえていさり火見えぬ沖のあかたに

春さめ

飛び石の上にこぼるゝ山吹の花に静けくはるの雨ふる

磯馴松

網引あびきする蟹が呼び聲いつか止みて月かよりたり磯の松が枝

春の暮

麥笛のふし面白くゆく兒等の小みち斜に夕日さすかり

窓の夕

ゆくりかく胸の悶えの消えし夕琴ひき居れば螢とび來ぬ

螢ぐさ

夏草のしげみの中のはたる草螢かる子の手折りて行きぬ

旅の夕

大佛の鐘の響きは遠く消えて奈良の都はゆふ霞せり

水車屋

川ぞひの柳のほどり家見えて水ぐるまの音庭鳥のこゑ

初夏

第五年級 大東 淡堂

青柳の蔭より今日も暮れはてふ待ちに待ちたる夏は來に鳧
春暮れて蛙かくある池の邊に夏を待ち得て五月花咲く

秋の歌三首

第三年級 宮野 專太郎

咲き匂ふ小萩が原に風吹けばこき紫の波ぞ立ちける
夏すぎて秋は來ぬらん我が宿の庭のあでしこ咲き初めにけり
秋風に藤ばかまこそ咲きにげれつゞりさせてふ聲はきかねぞ

和歌(二首)

第三年級 谷 澤 齊一

眞帆片帆歸る小舟も見えぬ追ちくぶの邊かすみたかびく (湖上のかすみ)
すゞみする人のすさびの笛すみて月かげ涼し夏の夕ぐれ (夏の夕)

俳句

第五年級 山 本 香 雨

追分や左は胡蝶右は馬士
乗りすてし舟を柳のあでにけり
池水に薫うつすや春の風
賣家の垣根や薔薇の時得顔
麥畑に菜の花ヌツと聳えけり

亂題五

第三年級 重 森 花 藻

世を渡る船とは見えす夏の海
姫百合や昔を語る屋敷守
名月や花とも見ゆる竹の露
夕晴れや青田の上の伊吹山
明日植える早苗洗ふや宵月夜

詠史三句

菅原道真

まん丸き月にも雲のかぶりけり

大石良雄

開く迄香り包みし牡丹かお

平 清盛

日を招く力も盡きて枯尾花

雜 錄



漫 言

第五年級 白井敬次郎

局部的思想

一寸先きは暗の夜かり、來年の事を云ふて鬼に笑れ
 かとは、佛者の所謂、老少は不定にして、諸行無常
 生者必滅、會者必離、より出でたるの言葉あるべく
 して、世界中之より不用ある言葉はあかるべし、而
 して此言葉たる、世の大抵の人々の口にし、又實行
 する所の言葉あり、かるが故に、彼の事をあやや、
 唯目前の計のみにして、十年百年の計をかさず、恰
 も鳥獸の日々食をもとむる事あきあり、殊
 に現時、明治照代の青年學生として威張れる彼等、
 或は新聞雜誌の多くも、又此範圍の者たるに至ては

吾人悲まざるを得ざるあり、之を以て彼の口にして
 誇り、又其目的とする所の者は、一の空中樓閣に過
 ぎずして、膽は大ある事小豆大にして、氣力あき事
 喪家の狗の如し。

福羽子爵嘗つて曰く、國民全般に、未來と云ふ事に
 着目せず、從て世界と云ふ觀念尠く、唯だ蠢々とし
 て食之索む、故に往々にして、日本主義の如き、豆
 主義を主張す、申すも畏しけれど、我が 天皇陛
 下を、日本に照臨せさせ給ふ、天皇かりと申し奉れ
 ど、日本にましめて、世界に照臨せさせ給ふ天皇
 かりと、申し奉るものあし、嗚呼斯くも國民の思想
 の狭小ある事よ、國の前途も覺束あしとぞ、誠に然
 り、人たるものは豈に日々の食に追はるゝのみにて
 可あらんや、宜しく百年の後を洞察し、世界てふ觀
 念を常に抱くべきあり。

絶對の美

人に絶對の美あし、神はいざ知らず、人間てふ人間
 苟も人間の範圍にあるものは、聖人とても多少の惡

の養成を計れよ。

虛榮心

癖はあるを免れざるあり、蓋し凡夫の悲は、到底完
 全と云ふ事を望むの、絶對不可能に属すと云ふ、天
 の宣告を受けたればあり、然るに世の父兄教育家中
 には、往々にして、完全無缺と云ふ事を大に望む者
 あり、之兒童青年に望む事の、實に過ぎたるものと
 云ふべし、而して強て之を望むは、却て兒童青年を
 惡癖に落し入るゝものあり、誠に心すべき事ありか
 し。

主義と獨立

萍や、今日はあちらの岸につく、とは蓋し人に主義
 なく節操なく、唯だ波のまにまに、漂ひ渡るを、嘲
 り歌ひしものかり、それ主義を守るの人は、成功の
 人あり、之あきの人は、不成功の人あり、見よ、彼
 の銅臭に堪へず、何々臭し、あごと呼ばるゝ人を、
 其人々の成功の人々あるを、主義ある哉、而して此
 主義たる、獨立と相聯繫して、相分れざるものあり
 蓋し主義を守るには、獨立の心を要するや明あり、
 嗚呼他日の青雲を志すの人々よ、宜しく主義と獨立

虛榮心とは、善く云へば名譽心、悪く云へば下賤か
 る野心、而して之往々にして、人の胸中にひそむ所
 の心にして、人前を繕はんが爲めに、人の事物乃至
 は智識を借り來りて、我が物顔に立振まひ、引ては
 自惚心とありて、自慢高慢、鼻持ちのからぬ事とあ
 りて遂には、鼻柱挫けて凹むこと三尺、面目地に塗
 みれて、一生不遇を歎するに至る。
 其花あり實ありてこそ、始めて良樹良木、人々の賞
 讃を受け園庭園、さては賤が籬根にも植らるれ、
 七重八重花はさげごもみの一だにあき山吹は、床の
 眺めのその外は、あごとて人の心を引くべきや、徒に
 馬牛の蹂躪に任すのみ、嗚呼それ人事又之れに外あ
 らず、一代巨億の富を致し、位人臣を極むる人々に
 は、花ありみあり、難苦あめつとして今日に至れる
 あり、さるを曉らで、春の野邊の小蝶、ひねもす花
 にあこがるゝこそ哀れかれ。